

南博一橋大学名誉教授の占領期の研究姿勢と行動

NPO インテリジェンス研究所理事長 山本武利

早稲田大学・一橋大学名誉教授

NPO 法人インテリジェンス研究所第 53 回諜報研究会

20 世紀メディア研究所第 170 回研究会

2023 年 10 月 28 日 早稲田大学早稲田キャンパス 3 号館 703 教室

1,

社会心理研究所報 第 1 号 1965, 4, 15

所報の再版にあたって

南 博

「丈夫で長持ちする」というのは、渥美清のことばですが、どんな研究団体にしても、やはり、丈夫で長持ちするのには越したことはない。わが社会心理研究所はどうかと、つらつら考えてみると、まず、長く続いているという点では、長持ちしているともいえます。ただし、問題は、丈夫だろうか、ということでしょう。

過去 15 年間、とにかく、やって来たにはちがいない。しかし、ずっと丈夫にやって来たわけではなく、時々病気にもかかったし、今だって頑健だとは、うぬぼれにもいえない有様です。ではどんな病気にかかったか。

出来たてのころは、学生さんばかりで、夢中で勉強したし、とにかく自主制作、サスプロでやっていたので、あるいは、いちばん丈夫だった時期かもしれません。そのころの映画・演劇・流行歌などに関する調査は、今日の眼で見れば、未熟そのものですが、一応誰も手をつけていなかったことをやっただけの意味はありました。

それからしばらくすると、つまり 5 年目ぐらいから、そのころの学生さんたちは卒業してしまい、所員の専任者が生れ、研究は軌道に乗るはずだったのですが、このころからマス・コミ病にかかりはじめました。注文仕事で今日の「トップ屋」的傾向を帯びてきました。「トップ屋」のトップを切ったなんて、悪い洒落にもなりません。もっとも「まるで研究はしなかった」というほど姿勢が崩れたわけではもちろんありません。毎週の研究会では、フロイトとマルクスをめぐって、延々と原書を読む気長な勉強はつづけたのです。ただし、それがわれわれ一同にとって、どれだけ身に着くものであったか。その自己評価は、これからのわれわれの仕事の大切な一部になるとおもいます。

最近の 3 年ぐらいは、このマスコミ病との意識的なたたかいに入りました。つまり、目下闘病生活から真の健康体の確立へ向おうと試みているところです。

この号にも報告していますが「社会心理史」というのをひとつの中心テーマにして、われわれの力を結集してみることが、この試みのひとつです。これも、やっとなち上げかけたば

かりで、さて、これから、どの方向へ、どう踏み出して行くか。それを探ってきた過程でわれわれなりに合点の行くところと、そうでないところを、ありのままにつきあわせてみた勉強の結果を『大正文化』と『社会心理史』の二つの本にまとめる作業を目下やっているところです。

ずい分、右往左往し、つまづき、ころんできた15年間だと思います。しかし、過去の失敗をただの失敗に終らせないように、ここで、これからほんとうに「丈夫で長持ちする」研究所にして行きたいと思います。以上がわれわれの自我のことばです。これをまた、われわれの前進のかけ声にもしたいと思います。

所報 第5号 1965, 9, 20

大正・昭和の社会心理史—その対象と方法—

南 博

現代日本は、昭和前期や大正期という比較的ノーマルな、かつ市民文化が開花した近代日本の一時期を理解せずに語ることはできない。この時期は、不十分であっても、「文明」が「文化」に、「国家」が「個人」に「外発」が「内発」に転化しようとした時期なのである。やがて、それらは、ファシズムのもとに無惨にその花を散らしていくのであるが、形式的にしろ市民文化が開花し、凋落する過程は、現代の課題としてもまた大きな意味を持っているといえよう。

しかし、歴史を語るときに、私たちが常に注意すべきことは「人間不在」におちいらないことである。といっても、「人間」という言葉は、個人心理、集団心理、社会行為という三つの側面からみうると考えられる。私たちは、ここでは、特にこの三つの「人間」を中心とした歴史が、どんな意味をもっているかを考え、さらに、物云わぬ「民衆」の心理行為から「民衆」それ自身に接近して見たいと思う。

また、その民衆を中心とした歴史が、大正と昭和前期にどのように展開していったかを考えたいと思う。

足が急ぎます(49)

ケネス・ホールグローブ教授に飼いなされた、生きながらえされたモルモットのような大山郁夫ほどのミゼラブルな在米生活はコーネルではなかったが、指導教授に配慮した院生、助手生活を送った。日本から持ってきた円ドルも枯渇していた。

敵性外人の登録は、警察で行われました。指紋をとられます。カメラとラジオも取り上げられますが、受取証を渡してくれて、戦争がすんだら返すといいました。戦後その約束は守られました（50）。

3 帰国した47年3月はまだ事前検閲時代—南の検閲スティグマ

—アメリカでの長い敵性外国人の用心深さをそのまま持ち帰っていた。習い性となっていた。鶴見俊輔らから検閲対処法を伝授された。検閲回避のノウハウを慎重に身に着けた。マッカーサーやGHQ当局をかなり付度した姿勢を学びつつ、文筆に参入した。とくにGIのフラタニテーション（情交）行動の記述を回避した。『化粧とゆらぐ性』1991年でも小平義雄は出てパンパンは出ない。

パンパン論と検閲—GHQへの抵抗姿勢と巧みな検閲回避（換喩）判別しにくい抵抗線—実質上の回避（妥協）

●「戦後日本における売笑婦の特質」『婦人公論』1949年2号、1月 『セクション』6, 434)

「この論文は占領中に、占領軍の検閲を考慮に入れて書いた。したがって占領軍の将兵や、官僚がパンパンの客であることを表現するのに、最高級パンパンの場合には、「日本でいえば大臣、大実業家、大将」、高級の場合には「日本なら代議士、高級社員、将校階級」に相当するものなどとした。隔世の感がある」（南博『日本人の心理と生活』1980、勁草書房、206）

4 1952年9月～11月 中国訪問

読売 1952・9・29 翫右衛門ら北京入り？ 中国総工会長から7名到着の報

朝刊 社会 3面

1952・10・3 北京平和会議開く 朝刊 アジア 2面

1952・10・11 南、中村両氏発言 北京平和会議 夕刊 国際 1面

1952・11・19 南博氏ゆうべ帰る “平和への確信深む”

警視庁、南氏を取調べ 朝刊 国際 7面

1952・11・21 文部省、処分を要望 南助教授問題、学内に両論

朝刊 教育 7面

1953・3・29 南博著「中国」鳥居キミ 朝刊 学術 6面

1953・4・2 中共教育の実態 帰国者に聞く 朝刊 アジア 8面

1953. 4. 13 集団精神の涵養に重点・南博 朝刊 アジア 8面
1956・1・23 中共代表の入国拒否 夕刊 行政 1面

朝日新聞 1952. 11. 19 朝刊 7頁
“平和を守るため出席”南助教授北京会議の印象語る

5. 一橋大学の南処分

一橋大学評議会記録から

昭和二十八年二月九日（月）午後一～三時

評議会

出席者 中山、山口、古川、井藤、赤松、山中、田中、久保、大平、
大塚、石田、都留、小原、高橋長、村松（以上十五名）

〈欠席者 加藤、上原〉

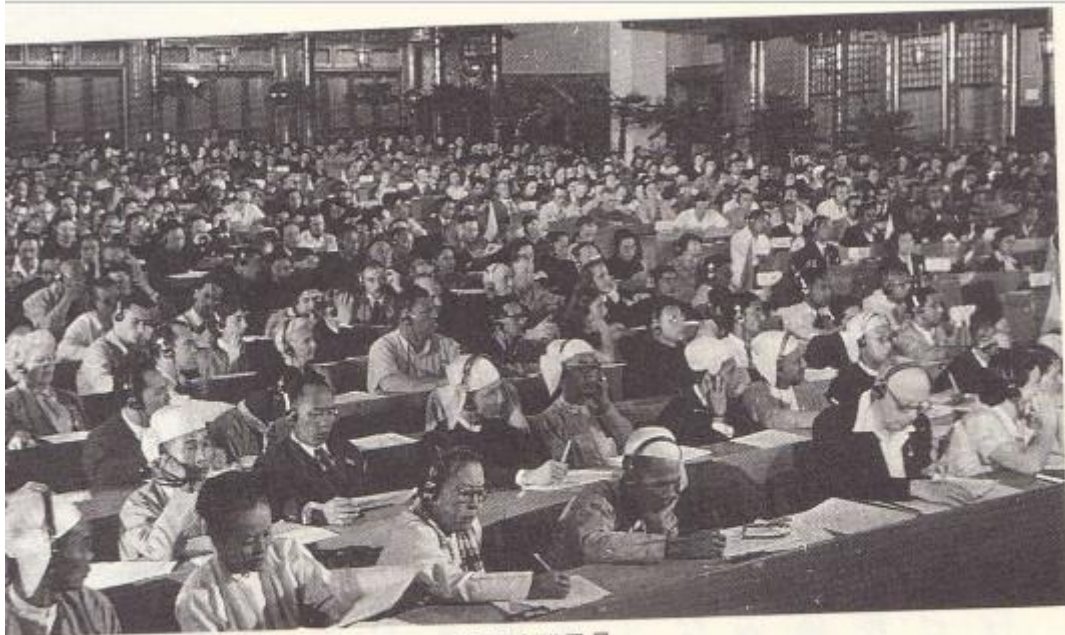
一 南助教授の件

経過説明ののち国家公務員法第八二条に規定する処置につき、討議、免職、
停職、減給、戒告の四つのうち、免職、停職は考えられないので減給か戒告かを決定することとなり、先ず、減給につき投票の結果

減給を可とするもの 七票

減給を否とするもの 八票

で減給案は否決された。



平和会議風景



会議で発表中の南博